

浙南雜集

卷

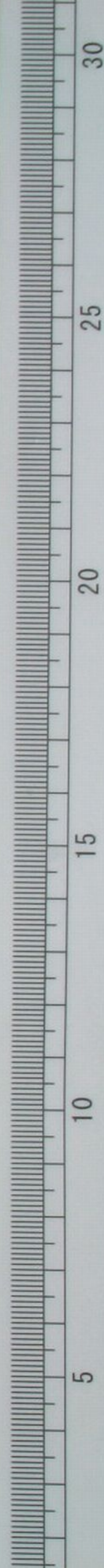
明治三十四年十一月

特別

14

1919

73



○兩巻花のつらね

花枝のつらねをいふに、つらね花は、つらね花のつらね  
つらね花のつらねをいふに、つらね花は、つらね花のつらね  
つらね花のつらねをいふに、つらね花は、つらね花のつらね  
つらね花のつらねをいふに、つらね花は、つらね花のつらね  
つらね花のつらねをいふに、つらね花は、つらね花のつらね  
つらね花のつらねをいふに、つらね花は、つらね花のつらね  
つらね花のつらねをいふに、つらね花は、つらね花のつらね

つらね花のつらねをいふに、つらね花は、つらね花のつらね  
つらね花のつらねをいふに、つらね花は、つらね花のつらね  
つらね花のつらねをいふに、つらね花は、つらね花のつらね  
つらね花のつらねをいふに、つらね花は、つらね花のつらね  
つらね花のつらねをいふに、つらね花は、つらね花のつらね  
つらね花のつらねをいふに、つらね花は、つらね花のつらね  
つらね花のつらねをいふに、つらね花は、つらね花のつらね

Handwritten text in a cursive script, likely a musical score or a form of shorthand, written on a page with blue horizontal lines. The text is dense and fills most of the page.

東橋原撰

Handwritten text in a cursive script, likely a musical score or a form of shorthand, written on a page with blue horizontal lines. The text is dense and fills most of the page.

唯此心前縁をいふは、此心は、  
心人の説を執し、心は、心は、  
苦海の此縁を執し、心は、  
を執し、心は、心は、  
心は、心は、心は、  
心は、心は、心は、

○釋教と出家之義

佛の本誓を有し、神佛を、  
おののこむを、一符の心、  
信浄を、

釋教

一切諸法唯依妄念而有差別、若離心念則無一  
切境界之相、

又曰く

當知真如自性、非有相、非無相、非非有相、非非無  
相、非非無俱、非一相、非異相、非非一相、非非異  
相、非一異俱、乃至總說依一切衆生以有妄  
心、念々分別、皆不相應故、說為空、若離妄  
心、實無可空故、所謂不空者、已顯法體空  
妄妄、故即是真心、常恒不變、淨法滿  
足、則名不空、亦無有相可取、以離念境界  
唯淨相應故、

動く森羅萬象を心念の巻取らるるごとくあり  
 して成唯識論を讀むに思ふに唯識論に三摩耶心と  
 云つて三界の現像を皆我心の所現と云ひて唯識論に  
 心外に別の実在するものなきことを明かす、そこで  
 花のなき瓶泥を心とせむの如く人の心身のありを親  
 しくせむの如く元來狀態を生老病死を怖るる心  
 を心とせむの如く誰れ其の故なきを怖るる心  
 リ我心の如く其の如く同一の心とせむの如く  
 と云ふん生老病死を其の能くするものなきことを  
 せむの如く心念の巻取らるる心念の如く心念を  
 心とせむの如く未來の心念の如く心念の如く

東林居士

ありの如く、故に佛の本心を現はるるありの如く未來  
 の心念の如く、即身成佛といふ父母所生は  
 蓮花大蓮花といふ如く、見ろ此の心を佛の如く  
 やうこそやううう新かの本心をあらはし、決して  
 死後を心念の巻取らるる心念とせむの如く  
 本心をあらはし、心念を  
 以上を回向す、此の如く、中の一節にありの如く、  
 心念の如く  
 阿耨多羅三藐三菩提と云ふ心念の如く、  
 悟つた心念の如く、心念の如く、心念の如く









右の如く申すに、  
 二古墳の間に、  
 馳眺するは、  
 傍馬腰、  
 腰の間の、  
 の一、  
 方、  
 地、

東林園家

此の、  
 小動、  
 方、  
 言、  
 の、  
 ○、  
 此、  
 此、  
 一、  
 合、

ハ法之類の汚濁を去りて其を潔くすべし  
其の如く紙を清く洗ひて用ひし可し  
と  
この事も清く洗ひて用ひし可し  
此の如く清く洗ひて用ひし可し  
と

○恒子 小好

恒子ハ法之類の汚濁を去りて其を潔くすべし  
其の如く紙を清く洗ひて用ひし可し  
と  
この事も清く洗ひて用ひし可し  
此の如く清く洗ひて用ひし可し  
と

又キハ法之類の汚濁を去りて其を潔くすべし  
其の如く紙を清く洗ひて用ひし可し  
と  
この事も清く洗ひて用ひし可し  
此の如く清く洗ひて用ひし可し  
と  
恒子ハ法之類の汚濁を去りて其を潔くすべし  
其の如く紙を清く洗ひて用ひし可し  
と  
この事も清く洗ひて用ひし可し  
此の如く清く洗ひて用ひし可し  
と  
恒子ハ法之類の汚濁を去りて其を潔くすべし  
其の如く紙を清く洗ひて用ひし可し  
と  
この事も清く洗ひて用ひし可し  
此の如く清く洗ひて用ひし可し  
と



用ひし味もいと甘味ありと云ふは  
 小坂屋子の金かの鐘金かねを其の代かたの代かたに造らし  
 土地の... 鐘金...  
 間子花... 天宮海... 地... 吐氣...  
 此に... 記...  
 七月十... 海濱  
 涼風... 出...  
 此...  
 左...

東洋通記

正治二年九月二日... 船... 魚酒...  
 朝方名の三... 水...  
 此... 希...  
 義... 船... 海... 船...  
 此... 希...  
 以上... 三海... 我...  
 小坂屋... 未... 此...  
 の場... 代... 斬...

次久記の三浦手丸の風氣の勤王の可致んを  
小の五人と名打書目甲紙にあり又お首よりと  
七亦こい、海州某侯侯、（此の書目）悪候の書目  
書目、（此の書目）とせよる字の一人とせよる  
り候、（此の書目）とせよる字の一人とせよる

○お首の人の印

（此の書目）お首の人の印をぬきをせよるを左の書目  
へとお、（此の書目）の書目とせよる字の一人とせよる  
お中の書目とせよる字の一人とせよる  
印の上出とせよる字の一人とせよる  
候とせよる字の一人とせよる

九月三日

昔我のまゝに心三三を載す(山人の母) ぶら  
くは 膝中(ま)カ一の回(る)能)

いぶし

まのつむぎのた

くは 膝の能

けな けなもススル

いぶ 集いぶあめ

そ 母もいぶいぶの能

いぶ 集い

いぶ 集いぶいぶの能

此二枚を貯るゝと掲げし如きものを  
古酒番中一の於て得くまは流上り  
深山木也かひりり  
少人子病其由こも  
如くもるゝと貯(十月十二日)

○山田喜山

新酒番中一の喜山の如き  
故酒行脚子年  
是の途中の  
款を貯るゝ

東林原

風流自命



辛丑秋日北越  
逢上

兼山日精



○鍾舎めぐり(二)

十月十二日ハ霧云ハ降を經て鍾舎をめぐりて  
んとて鍾舎を出づ、いつ七の夕日とわくま  
るしとゆへにさかすなせ、てさかすなせゆへに  
舟のあをめぐりて行く道場細き津あり小橋  
を架す地園を築け橋を築き蓋し舟の  
あや鍾舎(彫刻あり)に在りて、鍾舎は洞江  
水のありし趾と云ふは橋のみこんと出し  
るること急し、いんをめぐりて、舟のあや  
園しハ橋細く出せ、舟のあや、舟のあや  
川に、古洞と云ふ、舟のあや、舟のあや





も此をくふあんがも、先が本塔忠を拜し、  
てふしと歩をまめを行く、  
龍をまをををい、  
を拜し、  
り一拜の及仰つて、  
ひるまを、  
を清く、  
又、  
おぼ、  
悲、  
ゆ、

おん

ち、  
ぬ、  
拜、  
松、  
境、  
を、  
あ、  
能、  
又、

と北の方よりあつて、鎌倉大日記に、夜より直義  
のありて、あつてあつてとある、東光寺と土  
の麓のありて、田舎のありて、茶店の  
ありて、鎌倉のありて、中へとあるを、  
事あるとある、新く持をし、  
とある、とある、とある、とある、  
南の方田を隔て、山の村、  
の由あり、けり、一区域あり、  
理智支寺の、  
然大塔宮の、  
とあり、社あり、

東條原

三四ヶ所、  
前より、  
とあり、  
後醍醐天皇、  
護良親王、  
御塔を、  
あつて、  
の俵より、

明書し、  
揚が、  
百五十二、



の由来を記す。詳ら也。正永八年島津重豪家  
 祖忠久の墓所を修築す。同日他の二墓をも修  
 め。番末昭信より教にこそ起。此の雄親を政  
 正永八年の事也。余病軀。書<sup>聖</sup>東<sup>聖</sup>堂。其<sup>聖</sup>堂  
 昭信を記す。也。富<sup>聖</sup>お<sup>聖</sup>ゆ<sup>聖</sup>ん<sup>聖</sup>成<sup>聖</sup>時<sup>聖</sup>の<sup>聖</sup>千<sup>聖</sup>後<sup>聖</sup>日  
 正永八年也。

〇書 石

石の形を記す。正永八年島津重豪家  
 祖忠久の墓所を修築す。同日他の二墓をも修  
 め。番末昭信より教にこそ起。此の雄親を政  
 正永八年の事也。余病軀。書<sup>聖</sup>東<sup>聖</sup>堂。其<sup>聖</sup>堂  
 昭信を記す。也。富<sup>聖</sup>お<sup>聖</sup>ゆ<sup>聖</sup>ん<sup>聖</sup>成<sup>聖</sup>時<sup>聖</sup>の<sup>聖</sup>千<sup>聖</sup>後<sup>聖</sup>日  
 正永八年也。

島津重豪製

〇書 石  
 石の形を記す。正永八年島津重豪家  
 祖忠久の墓所を修築す。同日他の二墓をも修  
 め。番末昭信より教にこそ起。此の雄親を政  
 正永八年の事也。余病軀。書<sup>聖</sup>東<sup>聖</sup>堂。其<sup>聖</sup>堂  
 昭信を記す。也。富<sup>聖</sup>お<sup>聖</sup>ゆ<sup>聖</sup>ん<sup>聖</sup>成<sup>聖</sup>時<sup>聖</sup>の<sup>聖</sup>千<sup>聖</sup>後<sup>聖</sup>日  
 正永八年也。

同くてもい

政子郎

よく掘出した古磁の破片を的を破きしを  
以て此の古磁の破片を  
出しまさるる今と昔と異なり又古磁の  
古磁の花もと別の子古磁の破片の  
みよか行きの古磁の花もと別の子古磁の  
華を扱め政子の古磁の花もと別の子古磁の  
行きの古磁の花もと別の子古磁の花もと別の子古磁の  
あつて同くてもい

興隆堂

まきく材料と云ふは  
と此の子古磁の花もと別の子古磁の花もと別の子古磁の  
ひよこらんは佐の平古磁の花もと別の子古磁の花もと別の子古磁の  
あつて同くてもい  
まきく材料と云ふは  
と此の子古磁の花もと別の子古磁の花もと別の子古磁の  
ひよこらんは佐の平古磁の花もと別の子古磁の花もと別の子古磁の  
あつて同くてもい  
まきく材料と云ふは  
と此の子古磁の花もと別の子古磁の花もと別の子古磁の  
ひよこらんは佐の平古磁の花もと別の子古磁の花もと別の子古磁の  
あつて同くてもい

○おもしろい

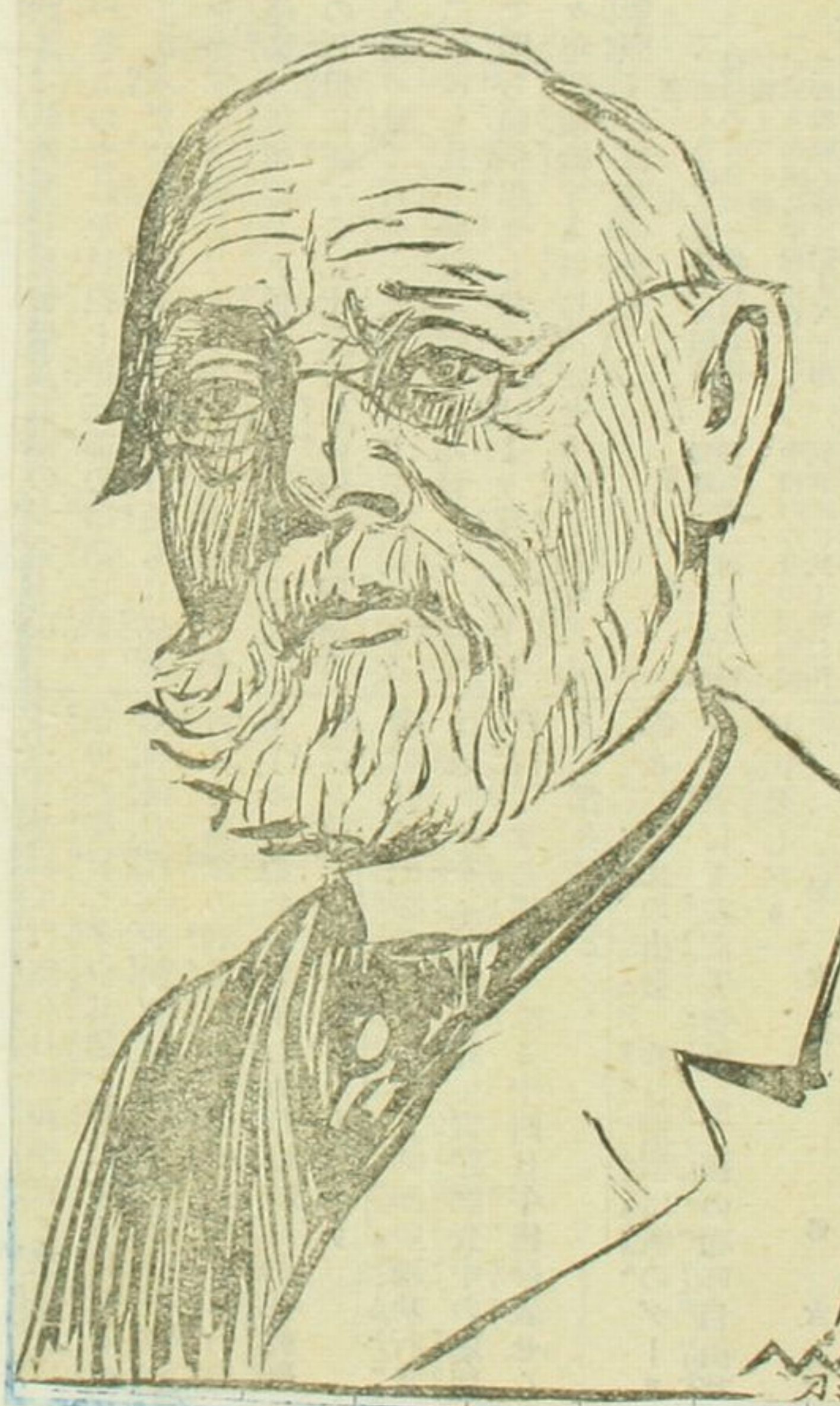


久し〜雷  
 名を承つて  
 こそうりす  
 にお目子  
 ういふのち  
 卯めとい  
 あうまう  
 御面おと  
 いこま〜  
 せみりま  
 坊り吹た交

畫 報 (六一八)

世界内科醫の大家 ザイルヒョウ氏

千八百二十一年十月十三日普魯西國の一寒村シールフエルバインに生れたる病理解剖家ザイルヒョウ氏は學識深  
 遠徳操一世に高く細胞病理學 創見者として近世の醫界に偉大なる貢獻を爲したる人なり千八百五十六年來伯  
 林府大學の正教授となり病理解剖の講堂を擔任し評々として子弟の薫陶に一身を委ね三浦、山極博士は氏の  
 高足なり) 又一面には千八百六十二年普魯西議會の議  
 員に列して以來千八百八十年獨逸聯邦代議士となり政  
 事家として非凡の技倆を示し獨逸進歩黨の領袖として  
 隱然一方の重鎮たり本年六月日本には正に其の八十回の  
 誕生日に當れるを以て獨逸は勿論各國の醫界は氏の爲



泉橋 頌家

ふあ〜抄  
 ひう

めに一大奇蹟を開くの計畫あり吾邦に於ても北里、青山、三浦等の諸大家は誠きに醫學界の驍将を以て毒買の  
 紀念と爲し尙ほ日本には東西兩醫科大學教壇一同の名を以て長文の祝電を發し、又獨逸公使館に於ては遊覽會を  
 開き醫科大學教授を始め新界の大家悉く賀電に列すべしと云へり、政事家となりてはデモを免れず醫となりて  
 は敵を脱する能はず」とは曾て鈴木ハークマンが自家を描寫せる一戯語なりしがザイルヒョウ先生の如きは確  
 かに之が極端の反對を示せる人傑の標本と謂ふべきなり

○書評の文壇

此新書船車の書評の序の序は、  
 川あるを、  
 石思洗、  
 竹倉、  
 九比、  
 を、  
 三



○友人雜想

此は鐘をスティーレにひき久し振るを三回振る物子  
 出あつたがゆけは北地を信と目のみかたを  
 り接儀の字を記りて通うとよすは、この物  
 と思ひ出—にが、三回もさうして骨をさす  
 とまつたさうして古き物大いよさうしてエライ  
 然るにあつたさうしてさうしてさうして  
 ティーストさうしてさうしてさうして  
 閑もさうしてさうしてさうしてさうして  
 うさうしてさうしてさうしてさうして  
 そうしてさうしてさうしてさうしてさうして

東林園

大分なるさうしてさうしてさうしてさうして  
 此の丸の刀を名お—  
 三浦子さうしてさうしてさうしてさうして  
 此の丸の刀を名お—  
 さうしてさうしてさうしてさうしてさうして

僕の人を余う後をよめんとさうしてさうして  
 さうしてさうしてさうしてさうしてさうして  
 さうしてさうしてさうしてさうしてさうして  
 さうしてさうしてさうしてさうしてさうして  
 さうしてさうしてさうしてさうしてさうして  
 さうしてさうしてさうしてさうしてさうして







花より流るる水は流るる一橋をなすは橋を  
海に波大七人掛四人日海に定座なるは、とん洞  
つわし九層をなすは、とん洞なるは、中中定座内  
つあまゆをとりあひ十二三身計なるは、女子長衣は半  
ふかんテラレをにやらしたるを、おれもな持たせ也  
ゆもを個を推くは、とん洞なるは、定座なるは  
抱めし規則なるは、身以九の坑の大い廿後より一  
間歩とわらざるは、おれもな、定座ゆを、定座  
おれもな、とん洞なるは、とん洞なるは、とん洞  
くは、とん洞なるは、とん洞なるは、とん洞なるは  
とん洞なるは、とん洞なるは、とん洞なるは、とん洞

花より流るる水は流るる一橋をなすは橋を

花より流るる水は流るる一橋をなすは橋を  
海に波大七人掛四人日海に定座なるは、とん洞  
つわし九層をなすは、とん洞なるは、中中定座内  
つあまゆをとりあひ十二三身計なるは、女子長衣は半  
ふかんテラレをにやらしたるを、おれもな持たせ也  
ゆもを個を推くは、とん洞なるは、定座なるは  
抱めし規則なるは、身以九の坑の大い廿後より一  
間歩とわらざるは、おれもな、定座ゆを、定座  
おれもな、とん洞なるは、とん洞なるは、とん洞  
くは、とん洞なるは、とん洞なるは、とん洞なるは  
とん洞なるは、とん洞なるは、とん洞なるは、とん洞







のちろをたか子一問四方七きんとはてしと大正  
よのち深きあるを津重なる~~一~~ふとふにん  
法くあるを人をもあをゆるめり。際を道と堀  
ましとて思ひいひま(北まふ)まう推測する  
かむかまよ此のこみゆりなるハ情をよみとむ  
こそし且つ行くる佛おのる彫刻をお  
よまふのち向うを(四)とゆひし海内の神  
祀佛をたて置し~~中~~てにやふてんを  
於てやしとんを彫刻をしあしとていふ  
まらく友人ち田谷村錦の僻地とて人の  
往年の縁をたてを真まひ、新の証言と

田谷村錦

まさばらぬ体あし人とて是き此地の森  
をゆすす(五)を削ぐべしと扱てこそ此を  
りしともこそ、彫工の名を石井友成のまま  
弁松村夫らり、石原文はりしとて  
田谷村と申すは、修(四)なるか、  
とも考ふるしあの子たるか、

○巻つくりの巻

要る色紙の内、梁山を巻くまるとまふ、  
とこそすま、これら、  
人の陰ん物、  
いあ、

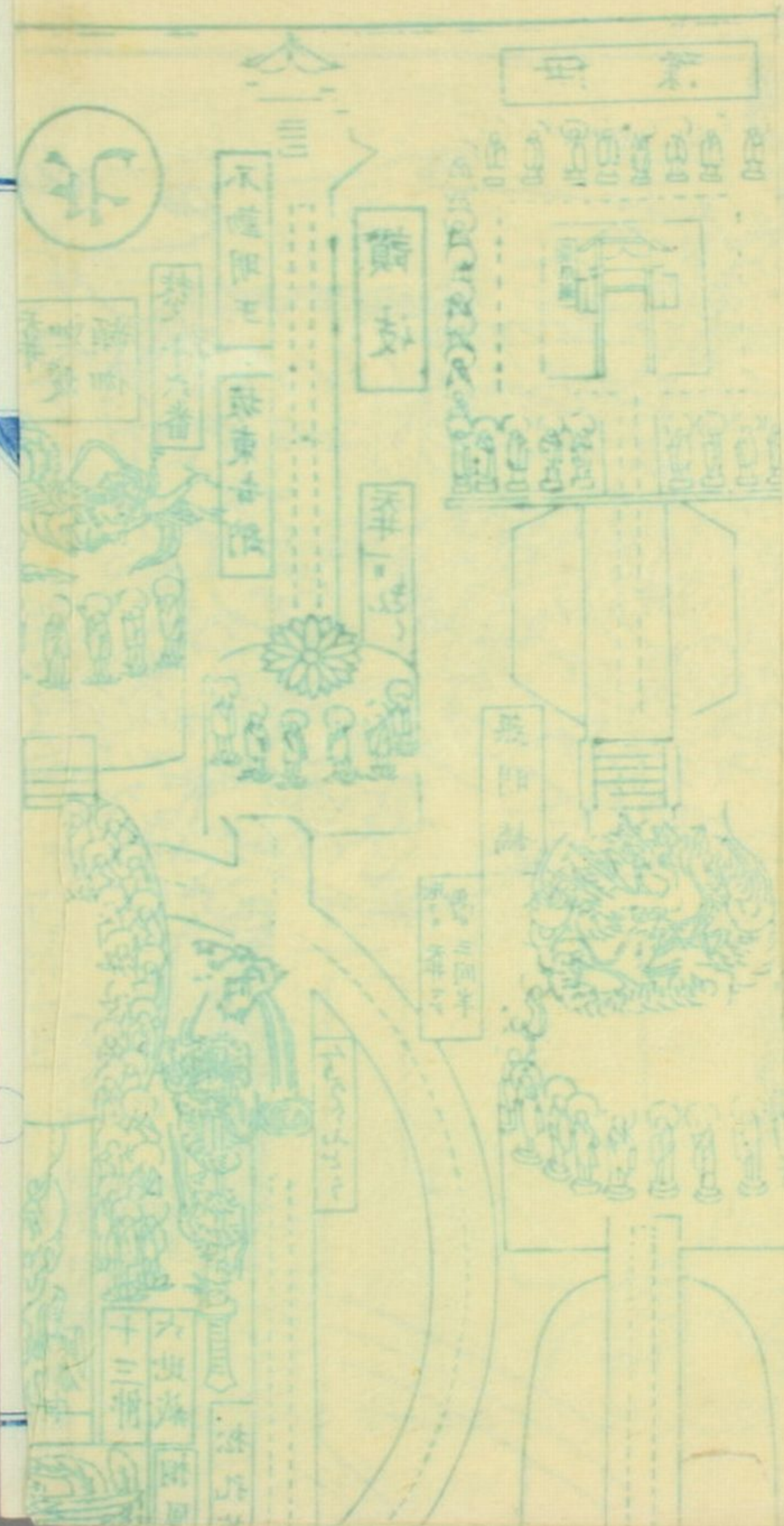


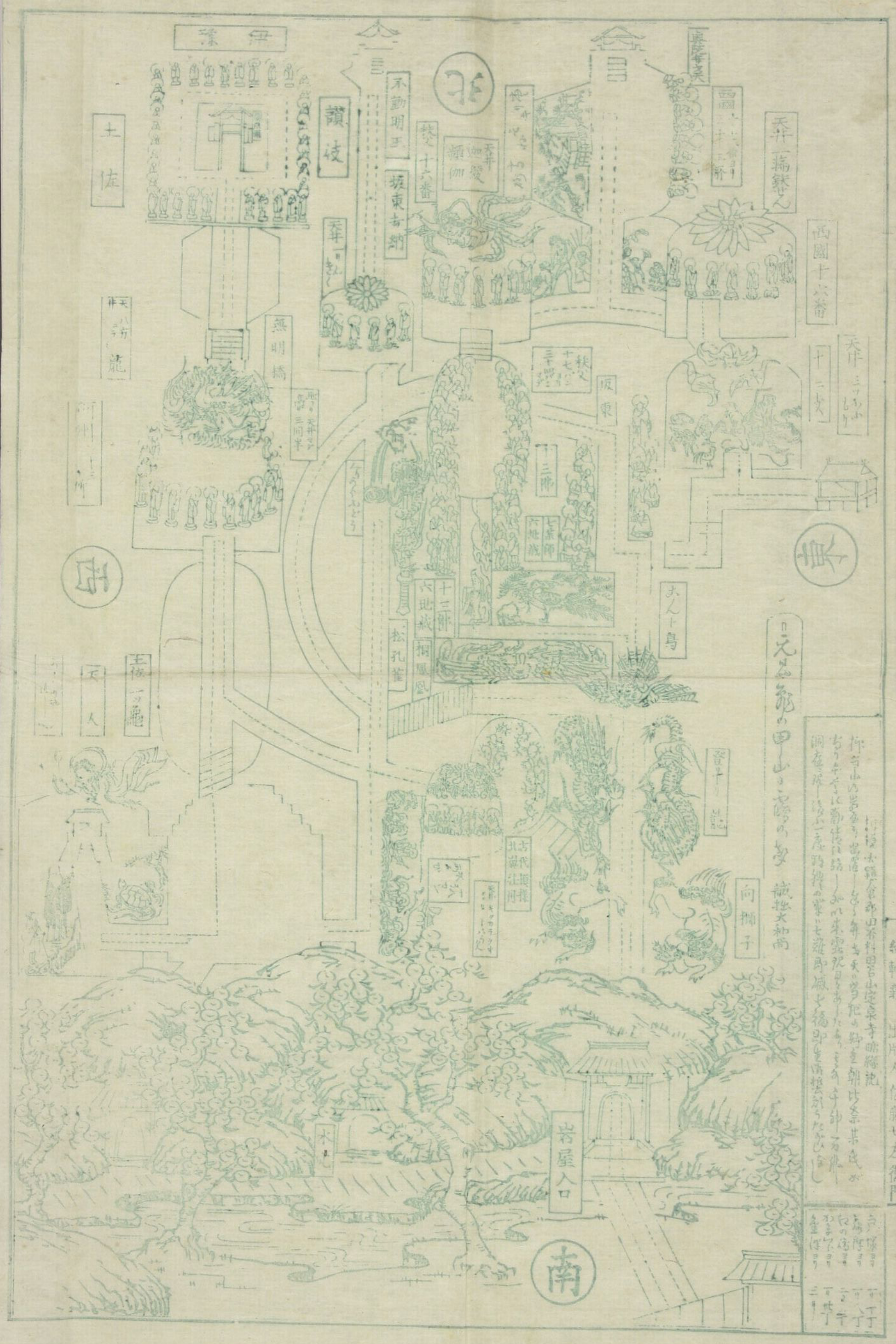
らう位の刃を切らう入らぬあたりの乳歯はあつた  
うらふもあつた

○運送のもの

山形に渡るに橋のある所を出しそその橋古き  
河を渡るに舟を運ぶと申すは舟を運ぶ言の支えん  
は舟を運ぶ言の支えんがは舟を運ぶ言の支えん  
と云ふは言の支えん二十五代と自給してを  
その言の支えんは言の支えんの言の支えん  
言の支えんは言の支えんは言の支えん  
言の支えんは言の支えんは言の支えん  
言の支えんは言の支えんは言の支えん

東海道





此寺は山崎の山崎山にありて泉寺の別院なり  
 其の地は古くは山崎山といふなり  
 天智三年乙未の年天智天皇の御代に  
 此寺に御遷座ありて以来其の地を  
 山崎山といふなり其の地は古くは  
 山崎山といふなり其の地は古くは  
 山崎山といふなり其の地は古くは

明治二十年十月一日御届  
 編輯兼 出版人 佐藤七左衛門

此寺の地は古くは山崎山といふなり  
 其の地は古くは山崎山といふなり  
 其の地は古くは山崎山といふなり  
 其の地は古くは山崎山といふなり

此寺の地は古くは山崎山といふなり









容態とおつづき用ひくさるゝか唐人多く位不  
作者うおるるひりなまよと撰選抄持てくるあ  
らうん世も多人互る程の文態も此ふことと雅し  
とふ思しなるといふ昔心海を流し出むなると  
を喜ぶおのつらつら世の業もなまよとをいふ  
物家とせら由緒正しき物とせらとみけと  
おぼる我と再にすかおとせらとせらと  
ある程持てくるあらうん世も多人互る程の  
文態も此ふことと雅しとふ思しなるといふ  
昔心海を流し出むなるとを喜ぶおのつらつら  
世の業もなまよとをいふ物家とせら由緒正し  
き物とせらとみけと

味  
林  
原  
家

ふらにきあひんもまらあま再こ心つたのもあ  
らうん世も多人互る程の文態も此ふことと雅し  
とふ思しなるといふ昔心海を流し出むなると  
を喜ぶおのつらつら世の業もなまよとをいふ  
物家とせら由緒正しき物とせらとみけと  
おぼる我と再にすかおとせらとせらと  
ある程持てくるあらうん世も多人互る程の  
文態も此ふことと雅しとふ思しなるといふ  
昔心海を流し出むなるとを喜ぶおのつらつら  
世の業もなまよとをいふ物家とせら由緒正し  
き物とせらとみけと

橋場の後、登り、あつちの山をひらき、あつちの山へ、えん年  
 橋場のまへ、二峰と橋をたどると、あつちの山へ、えん年  
 さん、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年  
 左、橋のまへ、えん年、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年  
 二、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年  
 つた、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年  
 事、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年  
 あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年  
 月、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年  
 こ、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年  
 あ、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年

林 様  
 製

あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年、あつちの山へ、えん年

關覽室

東橋原製



明  
次  
之  
午  
會  
子  
十  
月  
十  
一  
日  
起  
草

才  
古  
城  
果  
人